和7年度第1回柏市生涯学習推進協議会会議録

1 開催日時

令和7年8月22日（金）午前10時から正午

2 開催場所

柏市沼南庁舎5階 大会議室

3 出席者

（委員）

大野委員（会長）、木村委員（副会長）、新井委員、小沢委員、佐藤委員、須田委員、所委員、富田谷委員、長峰委員、林委員、向野委員

（事務局）

宮本生涯学習部長、田中生涯学習課長、生涯学習課竹内主幹、同廣瀬担当リーダー、同坂口副主幹、同蒔拔生涯学習専門アドバイザー、同岩渕生涯学習専門アドバイザー、同岡野生涯学習専門アドバイザー、村山中央公民館長、森川図書館長

4 議題

- (1) 諮問「第4次柏市生涯学習推進計画の改訂について」
- (2) 前回会議のふりかえり
- (3) 市民アンケートの結果報告書について
- (4) 柏市生涯学習推進計画の進捗報告について
- (5) 次期計画の素案について

5 会議概要

(1) 諮問

生涯学習部長から大野会長へ諮問書を手渡した。

(2) 前回会議のふりかえり

事務局から会議資料に沿って説明。特に意見はなかった。

(3) 市民アンケートの結果報告書及び柏市生涯学習推進計画の進捗報告について

事務局から会議資料に沿って説明。各委員からの意見等は以下のとおり。

（向野委員）

「ライフスタイルに合わせた学習コンテンツの提供」において、YouTube の視聴はどの程度あったか。実際に何人ぐらいが見ているのかが具体的に示されると、どの程度計画しないといけないかということが明確になると思う。

(事務局)

視聴回数は90回となっており、90人くらいのかたに視聴されていると推測している。

(向野委員)

今までの生涯学習のイメージは、場所を提供して、そこで何かに出会って。並行してこのようなメディア、YouTube なども利用していくことは、かなり潜在的な需要があると思う。この視聴90回を評価して、積極的にハイブリットを考えていく議論がこれから必要なことかと思う。そのような意味で非常に面白いと思う。

(大野会長)

総合評価の○と◎は、担当部署の主観的な判断ということか。

(事務局)

そのとおりである。

(富田谷委員)

「2-6 放課後子ども教室」について、担当課がアフタースクール課とあるが、この課は今年度新しくできた課だと聞いている。この評価は昨年度の経過なのか。放課後子ども教室はどのような評価をされているのか。

(事務局)

昨年度は生涯学習課が所管しており、生涯学習課で評価したものである。

(富田谷委員)

今後は、放課後子ども教室とこどもルームが一緒になるということか。

(事務局)

これまでは学習支援が中心だったが、昨年度高柳小でモデル事業として居場所型の放課後子ども教室の取り組みを始めた。事業の結果を踏まえ、今後はこどもルームと一体的に運営する「アフタースクール事業」として、放課後の子どもの居場所づくりを進めていく。

(大野会長)

私なりに良いと思ったのは「②-9 地域学校の協働活動」で、地域と学校がリアルでつながっていて、この方向性はよいと思った。

(林委員)

いろいろな事業が取組として書かれているが、一体何をどのようにすれば、そのようになってくるのかが少々わかりづらいため、具体的な成功事例があればよいと思った。

(須田委員)

「②—8 地域アーカイブ事業」について。図書館で、学校への提供を前提としたデジタル教材の作成を進めたということが、今後発展の可能性があると思った。具体的にどのくらいの数のコンテンツが作成されたのか。

(事務局)

柏市の自然の資源である「手賀沼」について、「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」という地域団体から写真や文献等の資料をご提供いただき、それを図書館でファイル化し、授業で活用していただくという取組を行っている。こちらは昨年度立ち上げたばかりで、学校との連携というところに課題がある。実際に報告できるものが二つほどで、評価としては〇だが、きっかけづくりを行えたという点ではこれからの伸びしろだと感じている。具体的に先生が、どのような部分が使いづらかったか、実際に授業で使うには資料の展開の仕方・作り込み等どのようにすればよいかなど、ご意見をいただいている。改善し、より活用されるようにできればと考えている。

(佐藤委員)

先ほどの林委員からの話と重なるが、おそらく単独というよりは、それぞれの事業が連携しあった時に達成されていくところがあるのかと感じた。そこを連携して良かったとか、一緒にといったところが次の計画で一緒にやっていけたらいいのかなと感じた。

(大野会長)

連携ということが改訂版においても重要な課題になってくると思う。

(4) 柏市生涯学習推進計画の進捗報告について

事務局から会議資料に沿って説明。各委員からの意見等は以下のとおり。

(所委員)

市民アンケートでの設問「あなたは、「生涯学習」ということばから、どのようなイメージを持ちますか」では、「生活を楽しみ、心豊かにすること」と「趣味や教養を高めること」は50%を超えていたが、面白いと思ったのは「生きがいを充実させること」も同じぐらい高く、この結果は生涯学習について良いイメージだと感じた。また、年代別の比較では、どちらかというところ、10歳代から30歳代までの人で「強く感じる」が多く、それが徐々に高齢になるにしたがって、生涯学習の必要性を「どちらかといえば感じる」に緩やかに変わっていくのが見てとれる。他方、計画案の9ページ上の表「生涯学習を行うことの必要性」を見て不思議に思ったのは、小中学生の「(生涯学習の必要性を)強く感じる」が54.9%と多い一方で、これが高校生になると18.5%と急に減り、さらに社会人になると31.5%とまた盛り返し

ている。これはなぜかと思った。生涯学習の視点からすると、このようなことが起こるのはあまり好ましくないという気がする。理由ははっきりとは言えないが、高校生といえば受験なのか。つまり、「生活を楽しみ、心豊かにすること」「趣味や教養を高めること」「生きがいを充実させること」というイメージを、もし小学生が持っていたとすると、それが素直に表現されていたのがこの回答の 54.9%。ところが、高校生になるとそれが急変するが、「どちらかといえば感じる」はむしろ増える、つまり、優先順位がどこか変わったのかもしれないということが想像される。社会人になってからは、それがもう一度変わる。この意味が大変大きいのではないかと思った。

もう一つは、市民アンケートでの設問「大人になっても学び続けることが必要だと感じるか」という、先ほどの話とつながっているところで、小中学生から高校生では先ほどと同じ傾向が表れる。この結果をしっかりと生涯学習の面からも考えていく必要があると思う。同じ市民アンケートでの設問「今後、教育機関などで学習してみたいと思うか」では、逆に、10歳代、20歳代よりも40歳代にピークが来ている。この意味を、今後学習してみたい、つまりもう一度学び直したいと捉え直すと、40歳代にピークが来るという意味をしっかりと考える必要があるだろうと思った。

(木村副会長)

私には高校生と中学生、小学生の子どもがいるが、高校生は学業だけで大変であり、中学生までは興味があったものでも時間を使うことが出来ていないと感じている。

勤めている図書館では、夏休みに小中学生がたくさん来館する。初めて図書館を利用する子も多く、その中では、点字の本を持ってきて、面白そうだから借りていく子もいて、そのようなところから何かきっかけができ、このままの気持ちを持ってくれるとよいと思いながら仕事をしている。いろいろなところにきっかけがあると思うので、高校生は忙しいと思うが、また大学入学を機に何か興味があれば、やりたいことが見えてくるのではないかと願いながら仕事をしている。今の中学生・高校生は本当に忙しいと思う。

(長峰委員)

計画案の15ページ、年代別40歳代くらいで「今後、学習してみたい」が増えるのは、30歳代・40歳代は、常に一緒にいた子どもが、子ども同士の関係に変わり、子離れして多少手があいた感じのころで、子どもと母親の関係が変わってくる年代だからなのかと思った。

(5) 次期計画の素案について

事務局から会議資料に沿って説明。各委員からの意見等は以下のとおり。

(大野会長)

一つ問題提起をさせていただく。計画案の5ページ「本計画における生涯学習の定義」が「③偶発的学習としての学習」をはずすという形で定義されたが、これは非常にわかるし、事業の選定に関してそのような仕分けは必要だと思う。ただ一方で、完全にそれを切ってしまうてよいのかというところが気になっている。18ページの【課題等】にある「楽しい、面白そうだから行ってみよう、気づいたら学びになっていた」の部分について、生涯学習に関する研修会で専門家が「うっかりとした学び」という表現をしていた。定義としてはこれでよいと思うが、多少ニュアンスとして偶発的な学習というところまで残しておくのがよいのではないかと、このあたりのご意見を伺いたい。

(新井委員)

学習する意思がある、のはわかりやすく、捉えやすいが、様々なライフスタイルで見ると、小学生の段階では、自然と何かの経験を積んでいく中で、自分で学びにつながる経験をしていると思う。障害をもったお子さんに、まずはいろいろなことをやってみようという私も言っている。その中で自分に合ったことを見つけていって、それが学校を卒業した後、将来の学びにつながっていくお子さんもいるということで、偶発的学習を切り離さなくてよいのではと思う。

(所委員)

総じていうと、良い方向に検討されているという前提で申し上げる。今までであった事業を整理し直すという観点から言えば、定義を絞るのは有効だと思うが、これからもっと付け加えていく、新たに作っていくという視点はあまり見えないというところが問題であると思う。その点から言うと「うっかりとした学び」は大変重要だと思う。受験勉強と比較してはいけないが、受験勉強は整理してしっかり学ぶ、生涯学習はもう少し漠然とした「私は何を本当は学びたいのか」や、漠然とした中からある時に「あ、これだったのか」とわかるような要素が大事なのではないかと。こうした要素をこの計画に入れるのは大変難しいのはわかるので、生涯にわたっての幸福の実現につながるヒントなどは入れておく必要があると思う。

(林委員)

生涯学習は、提供されたものに対して反応するというより、触れる中でたまたま嵌まってしまったというものだと思う。これは行政の計画なので、成果を評価するという意味で、そこまでいうと結構難しいというのはわかる。ただ、「偶発的学習も含めた、学習が伴うすべての行為を生涯学習と捉えま

で評価をしていくということであれば、その理由をもう少しわかりやすく書くなど工夫していただきたい。「定義します」と言われてしまうと決まってしまうため、「そこについての計画です」などの感じにすればよいかと思う。
(向野委員)

本来の主體的な「自ら学びたい」という気持ちを柏市は大切にしていくよというところでは、③のところまで矢印を延ばして、そのような余地を柏市は持っているということが出せるとカッコいいと思う。偶発的な学びについては事業には落とせないが、どこの機関でも、どこの事業主体でも面白いと受け付ける懐の深さがあるんだよ、柏市は、という表現になると面白いと思った。

(大野会長)

もう一つ、計画案の23ページ「柏市が目指す生涯学習像」について変更があったため、ご意見をいただきたい。これまでの議論を踏まえ、骨子案からは、サブとメインがひっくり返った形になり、「知の交流を通じた」と「ウェルビーイングが実現するまち」が追加された。これが、今後の一つの方向性として受け継がれていくものだと思う。

(林委員)

アンケートの中で「そうは思わない」の割合が高かったものが課題になるかと思うが、市民アンケートだと無作為抽出のため、例えば障害というと身体障害のイメージを持っていて、バリアフリーといえはハード面のことだと思っている。実際は外から見えない障害を持っているかたが多くて、特にメンタル面でのバリアについては共有しづらいところがある。ラコルタ柏フェスティバルでは障害者と触れ合う、一緒にやるということを何年かやってきている。そのような部分のバリアフリーを具体的にに入れていただけると嬉しい。また、「誰でも」と書かれているが、デジタルデバイドは意外とあり、家にパソコンやスマホやWi-Fiがない、あっても通信制限がかかって何もできないという人もいる。そういう意味で、フリーに使える端末のある場所、インフラとして誰でも使える、サポートもしてもらえる環境が必要だと思う。

(須田委員)

計画案の19ページの最後のアンケート自由意見で、生涯学習施設が遠いことや、アクセス改善の要望が出ているが、それを受けて、25ページの取組方針(2)の文書中に、「なお、アクセスに関しての要望があることに加え、改善を目指していく」のような言葉が入ってくると、より市民の声や課題を受けた形になるのではないかと思った。

また、23ページのモデル図について、逆三角形にするとか、そこにスパイラルのようなグルグルと矢印が上に向かって伸びていくような、やり取り

していく中で自分が変わっていくということが積み重なって、自分の学びに残っているというような（上に行くほど広がっていく）イメージのほうがよいのではないか。上に行くほど小さくなる三角形に少々違和感を感じたので、今更ながら意見を申し上げた。

（所委員）

2点ほど申し上げたい。一つ目は計画案の11ページに、障害の有無とあるが、高齢者になることを実体験すると、障害を持つということに似ていると感じている。若いころは、障害をお持ちのかたは大変だと思っているだけで理解することができていなかったと思うし、今でもできていないと思うが、歳を取ってくると耳が遠くなり目がかすむなど、いろいろなことが起こってくる。これはある意味誰にでも起こることで、自分自身が障害者になっていくという感覚に近い。もともと障害をお持ちのかたは、生涯を通じていろいろな形で対処してこられたと思う。一方、高齢者の場合は、高齢になって初めて障害に直面することになる。この視点を入れた方がよい気がした。障害者というカテゴリーと分けて、どこかに入れておく必要があるかもしれない。それによって、高齢者自身が気づいていない不自由さを補完できるかもしれない。

もう一つは、このところ急速に大きな問題になってきたAI。ICTについて言及はあるが、具体的な話はあまり語られていなかった。ただ、ここ半年ほどの間に、生成AIの影響力を自分も実感するようになったため、生涯学習においても大きな変化を及ぼす可能性があると思っている。しかも、非常にスピードが速いため、今、AIと呼ばれているものがACI（汎用人工知能）に進化するとも言われていて、研究者の中では、5～10年で人間の知能のレベルに到達する可能性があると言われている。正の面と負の面があるのかもしれない、また、どのように評価するか非常に難しいと思うが、人間のパートナーのような位置に来る可能性があるときに、それをある程度しっかり考えておかないと、この計画があつという間に陳腐化する可能性すらあると思う。そこをどのように考えるか是非ご検討いただきたい。

（佐藤委員）

障害というか、生きづらさを抱えた人が、自主的に自分が学んでいいんだと思ったときに、そういう人こそ学ぶべきで、その際、偶発的な学びが非常に重要で、すごく大事だと感じている。どこが学びのチャンスになるのかは個人で違うので、第4章以降の中でそれを整理して取り上げていくことは難しいと思うが、ご検討いただきたい。

（小沢委員）

先日資料をいただき一通り拝見した。私も県で計画を作っているが、計画

を作ることはなかなか難しい作業で、対象範囲はどこまで広げるのかについても、広げてしまうとそこで何かやっついていけないことが出てきて、それが難しくなり、議論になると感じた。

(富田谷委員)

23ページのタイトルについて、ひっくり返ったとあったが、生涯学習モデル図において、ウェルビーイングが最終的な目標になっているのであれば、こちらを主題に、サブタイトルに「実現するまち柏」のほうがよいと思った。また、指標は「増加」ではなく、増加以外の違う表現もあるかと思う。高くなる一方で減少ではないと思うが、増加という言葉はどうかと思う。

(大野会長)

23ページタイトルの一案として、人と地域の活性化ではなくて、人と地域のウェルビーイングの実現みたいな形で締めるのはどうか。

もう一点、23ページ「生涯学習のモデル図」で、「つながりの形成／スキルアップ」は集団と個人という対比で、「地域活動／仕事での活躍」も同様なので、一番下の「個人の学び」も「集団的な学び／個人的な学び」の表現とし、一番上を「人と地域のウェルビーイングの実現」とするとうまくまとまると思った。ご検討いただきたい。

6 傍聴者

なし

以上